

國學院大學學術情報リポジトリ

佐藤信夫の言語論：言語にいらだつ詩人のように

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 則夫, Ishikawa, Norio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000010

佐藤信夫の言語論

— 言語にいらだつ詩人のように —

石川則夫

はじめに：…同じと一つを問うこと…

差異から出発しなければならないのが文化に関わる問題である。文学研究などその最たるもので、己の個性、いや、ありていに言えば、己の孤独さをかみしめることが結論のようなものだ。しかし、皆、同じ一つの作家の作品を対象として、それこそ気が遠くなるほどの言述、記述、討論を積み重ねるのである。ときおり大きな学会などでは一つの作品を取り上げてシンポジウムなど開催するが、絶対に見解の一致など見たためしはない

のであって、いつでも消化不良のものわかれとなって、時間切れとなるからこそ終わるのだ。ただ、聞いているだけでも、いろいろと自分の言葉が湧いてくるのは確かなことで、参加した人々は各人がある同じ一つの作品への、自分の言葉を意識しつつ家路につくのである。しかし、誰もが同じ一つの作品について言及していると信じているのだから、どうもやりきれないという悲哀に似た想いがいつもつきまとう。だからこそ言語のことを考えるしかないと思ってきたのが、私の問題提起のすべてだと白状しておきたい。

一、レトリック論

かつて、と言ってもかなりな昔、たぶん大学入学の直前あたりだから受験勉強のただ中だったのだろう、鈴木孝夫著『ことばと文化』（岩波新書）を買って読んだ覚えがある。入試問題として頻出する書物だからという動機からだったような気もするが、しかし、ほとんど理解不能だった。なにしろ英文、古文、多少は現代文でも、各専用の辞書を持ち歩き、単語の意味を探し回っては眼前の謎めいた文章の暗号解読に地道をあげていた受験生にとっては、単語とその指示対象が常に一義的に対応しているわけではないとか、「ことばはいかに文化であるのか」といった表現に出くわしても、ただただ戸惑うばかりというのが正直なところであって、「たとえばさ、太陽という単語とお日様という単語では、対象は同じでもその意味するところが違うでしょ」といった具合に説明されても、ほとんどピンとこなかった。しかし、その書物が述べるところが、なにやら小難しいが故に広大かつ深遠な思想とか哲学とかいった意味ありげなものに思われたし、そう思わせるような話題や関連文献がいろいろ出版されてはもてはやされたりする時代でもあったのだろ

う。そうこうするうちに文学部に進学し、文学作品と向き合っ
て悪戦苦闘するようになってくると自然にその文章表現の仕組
みが気にかかり、「文体」という用語にも注意を払うようになってくる。そうして手に取ったのがP・ギロー著『文体論』（文
庫クセジュ）だったと思う。本棚から取り出して奥付を見ると、
一九八四年六月一〇日の第一九刷とあるので、これは学部卒業
後に読んだのだ。第一刷発行から四半世紀を閲している版で、
ところどころ頁の角を折っていたりしてちゃんと読んだのだ
なあ。で、それらの頁を改めてみると、フンボルト、ベルク
ソン、ソシュール、バシユラル、そしてR・バルトなどへの
言及箇所である。つまり、その頃の私の思考圏内に見え隠れし
ていた話題と著作者たちを巡る雰囲気がそうした面々を中心と
していたということだ。その『文体論』の訳者が佐藤信夫であっ
て、その後に『レトリック感覚』（講談社）を読んだのだった。
『レトリック感覚』は一九七八年が初版であり、その続編『レ
トリック認識』（一九八一年）以降、佐藤信夫は（レトリック）
論を専門とする研究者、言語哲学者として認知されていく。そ
してこの二書のタイトルにある「感覚」と「認識」が実は一つ
のものであることを、『レトリック感覚』講談社学術文庫版の
解説者・佐々木健一は次のように指摘している。

『感覚』と『認識』、フィーリングと思考、しかし著者はこの二つを別のこととして語っているわけではない。いなむしろ、極論するならば、著者の主張はこの両者が一つである、ということである。少くとも著者が例としたような上質なレトリックにおいては、確かにそのことが言える。感じ取られる質が精神のはずみであるならば、それは当然である。精神の喜びは何よりも発見の喜びであり、つまるところ認識の喜びと言ってよいからである。この主張を佐藤は、「レトリックの第三の役わりとしての『発見的認識の造形』という看板のもとにまとめている（本書二二頁）。古来レトリックには、「説得」と「装飾」という二つの効用がみとめられていたが、佐藤はその根底に「発見的認識」という働きのあることをみとめ、多くの具体例を通してそのことを明らかにしようとしたのである。

私の間違いないならば、佐藤自身のこの思索の出発点は、ドイツの哲学者フンボルトが言葉の本質を捉えた有名な言葉「有限の手だてを無限に用いる」にある。

我々の日常世界の真相が、片時も停止することなく常に揺れ

動いて止まない事象としか言えないような、捉えどころのない世界であり、そこで生起している多様さそのものとしての現象を、そのたびごと認識、表現し、結果または目標としてコミュニケーションを成立させるために、我々に共有化されうる記号としての言語は必然的に有限でなければならず、もちろん共通なルールの下に運用されなければならない。しかし、その限りでは、めったにお目にかかれない新規な事象もごく平凡でありきたりな事象を喚起する表現となってしまうばかりということにもなりかねない。既成の語彙項目に既成の文法というすでに共有化されている表現に忠実であるなら、誤解や曲解の心配もなく、世は平穩無事な暮らしが継続していく。しかし、これは理想的な発信者と理想的な受信者の二名から出発しなければならなかった言語研究の描いた絵空事に過ぎないと、この世のおびただしいレトリック現象は告げているのだということ。それを佐藤のレトリック論は文字通り口を酸っぱくして説得してきたのだった。つまり、レトリック現象とは、めったにお目にかかれない事態を忠実に表現するために、めったにお目にかかれない表現として産出されたが故に、一見すると奇妙奇天烈な言語運用とならざるを得ないというわけである。すなわちレトリック現象とは言語表現におけるリアリズムへの願望がもたらし

た、という意味で必要不可欠な文体をこそ示すものだということになる。佐藤論は、こうした認識をあらゆる局面で訴えていたのである。

心のなかの問題、思想の問題という面でも、従来の標準辞書にはなかったような新しい概念をいだいた場合には、それを適切に言いあらわすことがむずかしくなる。新語をつくるか、従来からの辞書に少し違反して表現するか、という問題が生じます。コードを無視するのではなく、違反するのです。…(中略)…新しい視角から新しい景色を見てもしまったとき、それを言いあらわそうとすれば新しいことばが必要になる。けれどもことは、文化、集団の共有物ですから、五十音をでたらめに組み合わせで自分勝手な単語を新調してもまったく用をなさないわけです。¹⁾

「新しいものの見方が新しいことばづかいを要求する」というのが佐藤論の基本テーマであり、『発見的認識の造形』という試行の具体例としてレトリック現象を収集、分析していった成果が先の二著に現れているのである。しかし、この用意周到かつ綿密なレトリック分析がもたらした真の成果がどうい

のであったか、それについて佐藤論はここで紹介したレトリック論とは異なる方向へ進んでいったように思われるが、それについては後で述べたい。その前に、このレトリック論の前提を念入りに説明し、説得しておくことが重要であったから、継続して言及されていくレトリック関連の論考において、引用文のバリエーションは執拗に反復されていくのである。最初の『レトリック感覚』においても、「序章1」、「序章2」として本文四〇頁以上を費やして、立論の根拠と発想の前提となる『発見的認識の造形』という視点を得るにいたった思考のプロセスを、古典レトリックの成立と展開から丁寧に説き起こしている。「修辞」、「美文」、そして「文彩」などと言われて装飾品扱いされ、挙げ句の果てに捨て去られたレトリックの数々の実例は、標準的な記述、発言から逸脱した表現として紹介、分析されていたが、そうであるが故に、この二著に引用され、提示された「文彩」の具体例は、特殊な記述例として見られてしまいかねなかった。まして、端的にレトリック現象を表す文例のほとんどが、著名な文学作品の文章であったから、佐藤論の核心部を形成している苦心は水泡に帰する恐れがあったのだ。つまり、標準的な言語運用の環境にどっぷり浸かっていた現代の読者において、やはり、標準的・正常な言語表現からの特殊例、各作家に

よる至芸のコレクションとその解説として受け入れやすかったのである。つまり、「効果的な言語表現の技術」として佐藤論が批判していたはずの従来のレトリック観そのままに回帰してしまう。したがって、佐藤論はレトリック論の発想を根拠づける方向をも探索していく必要があったのだ。しかし、これは佐藤のレトリック論と表裏一体となつて、ほぼ同時並行的に追究されていたこともあった。

二、意味論

『レトリック感覚』に先だつて刊行された『記号人間』（大修館書店 一九七七・三）は一連のレトリック論考よりもさらに重要な、佐藤信夫の名著の一つであると私は確信している。それは独自のレトリック論への期待を読み取らせることを主軸としながらも、それだけには収まらない言語論、言語哲学全般に及ぶ多様かつ重要な問題提起が含まれていたからである。たしかに、佐藤本人による後書きでは、「結局、本書で私が書きたかったことは、記号—言語—のダイナミクスとしてのレトリックの復権ということであった。記号論としてのレトリック、と言つてもいい」とは述べているものの、「記号学（ないし記号論）

への案内を……という編集部からの指示を、私なりに考慮しようとしていた形跡がある」とも見えるように、レトリック現象自体を記号論の問題領域でどのように考えるか、それこそ「記号—言語—のダイナミクス」においてレトリックのポジションを測定し直すこと、そういった考察が元になって論じられていることは明瞭であり、かつ、レトリック現象が生起してくる根拠にかかわる言及が随所に見られるのである。また、この『記号人間』にはそれとなく「伝達の技術」というサブタイトルも付されて刊行されており、この「伝達」にまつわる言語論的、記号論的考察の総体を俯瞰する視点が設定されていたこともこの論考の特徴と言わなければならない。たとえば、第一章「記号にかこまれて生きる」を開いてみよう。

言語による表現とその読み取りの真実性という問題は、認識の成果を認識すること、すなわち自分の認識を他人の認識に移すという相当にじれったい操作、個人から個人へ認識を受け渡すという危っかしい手づきを含む難題なのだ。（…中略…）私たちはつねに、手さぐりで、意味を読み取りながら生きている。まずは目に見え耳に聞こえる材料（現象あるいは記号表現）をたよりに、目に見えぬもの

や耳に聞こえないもの（真相あるいは意味）を推定するといふ、いらだたしい宿命からのがれられない。（p6～7）

つまり、言語的伝達＝コミュニケーションの成り立ちに関して、決してそれを楽観視できないという視点に立つことから思考を開始し、また、人間がこの世で生きていくことはありとあらゆるものに記号を感じ、そこに示唆される意味の予感にときめくか、おののくかしつつ認識し、判断し、行動するということを見据えながら、この全プロセスを表現してみようか、というもくろみを見て取ることができるであろう。そして、こうした問題提起の必然として、これまでの言語研究における前提となってきたコミュニケーション成立の想定図面、理想的な発信者と理想的な受信者の言語交換の回路を、絵空事としか思えない、果たして伝わったのか、あるいはちゃんと読めたのか、と常に懐疑的で不安におののく言語運用者の立場を堅持することがそのまま理論の行く末を決めるということにもなっていた。だから、「記号に生きる人間」の考察における研究者の宿命は、我々という共同体における相互了解、正解のしかたを研究するのではなく、一つの指向対象に向かって言語表現を行いながら、なぜ同じにならないのか、どうして誤解してしまうのかといっ

た、いわば誤解の研究にならざるを得ない。

たとえば《太陽》という現象の記号性は、物理的正体を探求する科学者にとって、あるいはメタフォリカルな意味を捉えようとする詩人にとって、また、実利的なご利益を期待する農夫にとって、それぞれにとって、誤解の可能性をはらんでいるはずだ。誤解の可能性こそ記号の必然的属性である。記号＝意味とは謎の別名でもある。科学者にとっての《太陽》は即自的存在物としての天体である、と当の科学者たちは信じているにしても、実は彼らにとってもまた《太陽》は記号であって、記号以上のものではありえない。記号はおそらく現象の別名のひとつでもある。（p12）

佐藤論の意図している「記号」なる用語は、いわゆるシーニュのことではないこともうかがえる。「記号」は「意味」であり、「現象」でもあるのだ。では、いったい何が「記号」、「意味」、「現象」を見出すのか。それは「周囲のものに対する関心だといえなくもない」と言う。それはでは、人間の生とは刻々と湧き出て止まない関心のことである、と言ってもいいことになる。記号は記号体系において整然たる様相を呈しているわけ

はなく、いつでも読み取る行為を潜在させて成立しているという。したがって、誤解の研究は常に記号を記号として認定する人間、読み取る人間の特殊性を視野に入れておき、これを失念しないまま考え続けるという困難を背負うのである。第4章の「切り分けと差異性」から拾ってみると、「事実の記号性」を説明して、

要するに、すべての事物はそれに対する人間のかかわりかたによって記号性を与えられる、ということだ。その事物が発揮する意味作用（意義）は、読み取り手がその事物に対していただく関心／欲求によって生ずる。（p 61～62）

そしてこの「読み取り手」が多種多様な関心をそれぞれいだきながら、一人ではなく複数で生きているという日常世界のありようを忘れないとするならば、「記号過程の図式化について」の諸説、ブルームフィールド風の図式から、オグデン＝リチャーズ、ヤコブソン、ソシュール風に至るまでの図式を総覧してみても、発信者と受信者との言語運用過程を理想視して構成された回路には、誤解や曲解などに代表されるようなコミュニケーションの挫折経験は、定義上からしてあり得ない。いや、無視

されていると言ってもいい。しかし、現実の言語運用の主体、あるいは客体としての我が身を振り返って見たときには、意思疎通にはいつでも《すれ》あるいは逸脱《が》つきものであるという痛切な経験が異議申し立てをせずにはいない。ではなぜズレてしまうのか。人はその顔貌からして個々ばらばらであるように、実に多種多様な興味、関心を持ちながら複数で生活しているのが現実であるとするならば、肝心な話が通じないというのはまったく当然の帰結と言う他になく、結局は「潜在する視点がちがう、いいかえれば、発言者の位置、態度がどうしてもからんでくる」（第9章「レトリック現象」p 149）からであり、逆に誤解や曲解があり得ない記号体系によるコミュニケーションの成功例とは、「記号に対する人間的態度が一定だから」（同）ということ、たとえば交通ルールのような強固な約束、フレームの内側にいることが前提となる。

ただ、言語についてだけは、どのような視点に立って表現し、どのような視点に立って解読し、どこまでうがって解釈していいのか、ということが、指定されていない。言語のコード（辞書と文法）をできるだけ標準化することはできるだろうが、その有限のコードを無限の現実に適応す

る人間の位置と視角を標準化することができない以上、すべての言語表現はレトリカルだ、偏向している、と言わざるをえないのだ。(同p150)

ということは、あらゆる言語表現は少なからずレトリックを宿命的に含んでいるのだとするなら、標準、通常、ごく普通で、正常な言語運用という基準線自体が、実は妄想の産物だったかもしれないという疑念が湧いてくる。「みんなお互い逸脱し合っている」現象、「避けきれぬ誤差」、「自然発生的なずれだから現象と呼んでおこう」(同p154)と、佐藤論で展開されるレトリックの概念は、次のような含みを持たせた表現に落ちていく。

どう率直な表現をしても(したつもりでも)、言語による表現は必ず屈折して伝わるのだ。とすれば、あらかじめ屈折まで考慮した表現によって、かえって《すなおな》コミュニケーションを成立させなければならない場合もあるはずだ。(同p156)

こうして、レトリカルな表現の必然の姿が浮び上がってくるのである。そしてこのようなレトリック観は、言語表現の表層

に現れるコード違反の具体的な姿を対象化するばかりではなく、その手前に広がっている意味論の領域を抱え込むかたちでの発想であると思に至るのである。

三、制度の歪みからの風景

言うまでもなく語彙と文法に代表される言語体系とは人間を取り巻く制度の最たるものだろう。そして、その規定に則って厳密に運用される記号の組み合わせは、原理的に同じ対象を不特定多数の発信者と受信者に共有化されてしかるべきである。また、たしかに日常生活にあつてたいの時間は、人は人々とともにただなんとなく物を見、聞き、あれこれと行動して、ささいな意思疎通のミスがあつても気にとめたりはしないだろう。しかし、それは実に平穩無事な世の中の、特に不満もない日曜日あたりに思い描いた日常の風景にすぎないのかもしれない。仕事という緊張状態にあつての交渉事や会議の打ち合わせ、懸案事項の処理をめぐっての話し合いになった途端に、制度であつたはずの言語とその運用は、ささいな齟齬の連鎖から想定外の險悪な事態へもつれ込むことさえ日常茶飯事だ、とも言えるわけだ。あるいはもっと卑近なことでは、共に食事を楽しん

だものの提供された料理の味について、美術館で出会った絵画の印象について、話題の映画の見所について、自らの確信を口外し、それを相手に納得させ、また相手の胸の内を了解するといったことをねらって交わされる数々のことば、実際の言語運用を何度となく交わし合つての他者理解とはなんと困難なことなのであろうか。結局のところ、人間が自分の心の奥底とやらをしみじみと感じ入って、どうやら動かしようもない存在物が自分の内側にあったと自覚するような経験は、他者の理解を当てにできる表現になどならないのだ。それでもどうあつてもはつきりさせ、口外せずにはいられないまま言い表したところにレトリック現象が生起するというのが佐藤論の道筋であり、この現象において、制度からズレた風景の発見とその表現におけるコード違反とは共に発生する。

既製の形容詞にあてはまらぬ、名状しがたい気もちに對しては、いつも語彙は欠落しているのだ。私たちはつねに、《もっと的確なことは》を探している。

詩人が発信し、詩の読者が受信する記号は、きわめて緊張した状態にある。詩人が《正しく》命名しなおした名まえは、辞書的な《正しさ》からずれている。(第11章「レトリック

クの発生」p 184)

佐藤論の論述には、時折、思い出したように「詩人」という芸術家が登場する。そして、この「詩人」はレトリックの名人、練達の士としてのお手本というよりも言語表現自体への悶々かつ鬱々とした悩みを抱え込みながら生きている人という点で、先に述べ立てて来たようなデイスコミュニケーションに戸惑いつつも、発信と受信に関わる難問解決に向けての緊張状態にさらされている普通人たる我々のことでもあり得るというわけである。また「詩人」のことばと同様に、制度からズレた風景を見、やや逸脱した表現を採ってしまった普通人の努力も、その表現のよつてたつ見方を通して、他でもないその人らしさを喚起することば遣いに到達してしまふ。そのことば遣いそのものとしての個性が、ことばの身振りとして注目を集めるという仕組みに気づいたとき、言語はメッセージ運搬の道具、すなわち制度的な記号体系であることをやめる。

言語が伝達の道具ではないと言えぼうことになる。が、運搬の道具だと思つていたものが、それ自体妙に気にかかる存在となるときがある。聞いたことばの意味は忘れてし

まったのに、そのことばづかいだけがいつまでも耳に残る。そのとき、おそらく文学が発生した。そのときから、ことばは（そしてことば以外の記号——絵や音——もまた）伝えるだけではなく、心をそそり、心を動かすものとなった。聞き手の参加を強要することによってはじめて伝達は聞き手と一体化しうることを知りそめた。それは現象から技術へ変わったのだ。（…中略…）伝達の単なる道具でなくなつたときにかえつて強いコミュニケーションが成立するといふ、矛盾と言えば矛盾するその様相は、しかし言語に内在するものであつた。言語が透明な包装紙であることをやめたとき、いつそう言語の正体をあらわしたのである。

ここである「強いコミュニケーション」の成立とは、単なる発信と受信の回路の完成、解釈の正解には収まらないし、「言語の正体」という言い方も、それ以上の言及はされていない。それは「文学の発生」という地平を踏まえての「ことばづかい」である点が重要で、たしかにこの引用部の前後では、現象としてのレトリックから技術としてのレトリックの成立を説くことが主たる話題ではあるのだが、この技術、技法が表現者の意図をよりよくリアルな形で、受信者において実現するという言語

記号運用におけるハイフィディリティを説明するわけではない。いわば、「詩」、「文学」の読み取りにおいて出現するコミュニケーションの実態や内容を問題化するのではなく、そこでの伝達の強度そのもの、表象の喚起力自体の強さへ言及しようとするものでもあつた。佐藤論の記述は、ややもすると文学論、文学の言語表現機構へと介入していきそうなベクトルが認められるが、それは人間の観点および感性、つまりは生き方の個人差を出発点とした言語論を志向してきた以上、これは必然的な勢いであつた。あらゆる言語表現が、皆、多少は逸脱しながら提出されているというのは、また、それらが多少とも文学的だということと同義である。しかし、ここから直ちに文学的文章の分析へと進むことはなく、標準からの逸脱、軽度のコード違反の実相とその成立事情の分析へ、佐藤論はあくまでも踏みとどまるかに見える。先に説いてきたように、レトリック現象の周到な分析が多くの示唆に富む知見を切り開き、提案し続けていったところに佐藤信夫のレトリック論の評価が定まっているのだが、いままで言及してきた『記号人間』一冊においても、意味論的な問題領域をつねに意識し、配慮した上での考察が散見されたし、なぜ意味が多様なかたちで生起するのかといった問題提起から言語記号の仕組みを分析してみせるの

がその趣旨であつた。そして、この問題意識はその後の佐藤のレトリック現象への関心の裏面にありつつ、成長していったように、私には思われるのである。それが『意味の弾性 レトリックの意味論へ』（岩波書店 1986・8）のなかに結実していたように思う。

四、世界を切り分けること

一九八三年五月から翌八四年の八月まで『思想』（岩波書店）誌上に断続連載され、八六年八月に刊行されたのが『意味の弾性』である。その「はしがき」には「二十世紀（後半）の『思想』はいつも言語への反省ないし関心をめぐって展開している」ことを確認した後で、にもかかわらずあまたある言語論への不満を率直に述べている。

しかし、そもそも納得以前に、関心事としての、私自身の《意味への不安》あるいは《悩み》が一般の意味理論が目標として立てているものと、質がちがうような感じがしてならないのであった。つまり、問題がちがうのではないかと、私はいつも思いまどっていたのである。私自身の不

安ないしは悩みとは、ありていに白状してしまえば、ことばがなかなかうまく通じない、ということであつた。書くときでも読むときでも（いうまでもなく話すときも聞くときも）、私は、人々とことばの意味を共有しえていないのではないか、という不安からのがれられないのであつた。

こうした自らの素朴な経験への反省から、『意味の弾性』は、ことばの意味が必要以上に固定してしまうことに対する不安を、「意味の《区別性》への不安」とし、ことばの意味が言つたそばから曖昧模糊となつてしまうことに対する不安を「意味の《流動性》への不安」と呼んで、相互に逆向きになる二方向の意味論的不安について考察することから始まつていた。

言語が現実世界を切り分けて固形物のような確たる対象を生み出してしまふことへの不満を、読者への注意喚起や警告として、その論考の至るところで述べ立てていたH・ベルクソンの考え方を参照して、「1 意味の《区別性》への不安」は進んでいくが、たしかにベルクソンの言語不審は徹底していて、彼自身の哲学への覚悟と言つていいようなことばはすぐに思い浮かぶところである

私が真の哲学的方法に眼を開かれたのは、内的生活の中に初めて経験の領域を見出した後、言語による解決を投げ棄てた日である。その後のあらゆる進歩はこの領域の拡大であつた。⁽²⁾

人間が時間・持続を考えるとときに、いつでも空間の上に翻訳してしか表現も、思考もできないことを告発し続けていたこの哲学者の「哲学的直観」について、はるかに見通しながら、それでも言葉で自らの認識論を展開し続けていったことに、「いわば出来ない言語を手なづけ、飼いならしつゝ利用する」(p. 28) という狡猾な手腕を認めつつ、一方で「意味論的な悩みをまたぎ越えて語り続けたベルクソンの認識論が、じつはレトリックの問題をも『認識論的なことばづかいにおいて』論ずる結果になつていた」(p. 30) ことへと思い至る。流れ去るメモデューのような「純粹持続」における世界像を見事に記述してきたベルクソンの言語運用方法とは、また、意味論的不安を解消するためのヒントでもあったのかもしれないが、しかし、不安へのおのき自体を言語において分析、解消する方策ではなかった。また、これとは逆向きの試行を『ポール＝ロワイヤル論理学』を参照して、ことばの意味がズレないように、精密に

《定義》してから使用する方策を検討するが、「意味の《流動性》への不安」を避けるための厳密な用語定義もほかならぬ当の言語によつてするほかに手段がない以上、定義は原理的に循環してしまう。それを回避するためには、定義不要でそれ自体が自明である、つまり、語とそれが表す「明晰かつ判明な観念との結びつきが、すでに成立している」とする「原始語」へ依存するところに落ち着いてしまう。それでは、語と観念との結びつきとはなんなのか。そして、観念の向こう側にはしばしば事物とよばれる指向対象がイメージされるとすれば、意味が固定的か流動的かの問題は、語と観念と事物の間を関係づけるベクトルを、意味作用の動きとして明確化できれば解決がつくかも知れないということになる。「4 言語記号の随意性」と「5 ふたつの《ロゴスの構図》」へ進む考察は「意味の弾性」の核心部へ分け入るところとなつてゐる。

問題は、事物に先験的に備わつてゐる事物としてのカタマリ感が、そのまま寸分の狂いもなく観念と親和的に結びつき、その観念に一つ一つの語が貼付されてゐると納得するか、それとも、諸言語体系における意味作用及び指向対象の相対的な構造を踏まえて、言語の構造こそが事物のカタマリ感を提供していると考えるか。佐藤論は前者を「ロゴスの構図」、後者を「逆

「ロゴスの構図」と呼び、もちろん、言語名称目録観とか言語道具観といった視点に安住できないからには、ソシュールの残した言語論考の新たな展開を見出した一九八〇年代以降の思想状況にとって評判のよい「逆ロゴスの構図」の検討が中心となった。しかし、この検討作業は単に『一般言語学講義』とその新解釈が提供した言語論への批判検討ではなく、丸山圭三郎によるソシュール研究の成果として発表された『ソシュールの思想』（岩波書店 一九八一・七）と、それ以降展開されたいわゆる丸山言語哲学への批判的考察という側面も強く持っていたことは、4、5章を読めば明瞭である。特にソシュール用語における「二つの恣意性」をめぐる検討から、丸山論の主張する「記号学的構成原理」における「恣意性」という機能、自然のなかには、言語体系に反映するような分節構造はいつさい含まれていないという意味での「恣意性」、言い換えれば無根拠性こそが言語記号すなわち文化の特質であるという思考が、先の「逆ロゴスの構図」を特権的なものに仕立て上げるが、しかし、では、世界の方、事物の側には絶対に分節、切り分けの根拠はないのかという不安が生じるという。

言語以前に世界はすでに『自律的に』分節構造をもっている

という信じかたも、逆に、言語的分節の尺度がその基盤を言語外現実のなかには潜在的にもいつさい有していないという『自律性』の説も、どちらも少々強引ではないのか、と、私ははなはだ煮え切らない感想をもてあますことになる。

（5）ふたつの『ロゴスの構図』（p.132）

「構成された構造」としてのラングが「透視板上の網目模様」のような具合になって眼前にあり、それを透かし見ると世界がその網目通りに切り分けられて見えるとして、その網目の構造が根源的な「記号学的構成原理」の次元では、「随意的」（佐藤論は「恣意的」の用語をこう呼ぶ）であり、自然、事物の側にはどう網目を構成するかの根拠はいつさいないと、そのように丸山論は強調する。³⁾

にもかかわらず、それほど『随意的』な言語がなぜたまたま『構成された構造』となって『世界』を切り分けることができるのか、なぜ現実を切り分けて幻想的かつ日常的な意味化された『世界』を私たちに与えることができるのか、という問題を、『随意的』原理によって納得する

ことはむずかしい。(p133)

つまり、世界側に根拠があるか、はたまた言語側に根拠があるか、といったもとのつまりは世界と言語認識の整合性への期待がなせる業にすぎない。そして、どちらにとっても意味作用のベクトルは一方通行であって、区切られた事物としての世界も、構成済みの構造としてのラングのレベルでも、その限りでは「意味の自己同一性」は保証されていることになる。しかし、佐藤論の問題意識は、いつでも現実のコミュニケーションの試行錯誤という経験的事実の実態、実相の解明に向かっているのである。この前提に戻るならば、たとえば丸山圭三郎の企図する言語哲学が拓こうとする領域とは、言語への問いの立て方そのものが最初から違っていたと言わざるを得ない。すなわち、ロゴス対逆ロゴスのどちらかの構図を特権化し、そこにおいて知性と文化の考察を拡大して行こうとする理論的な誘惑を、佐藤論は慎重に拒み続け、再び経験の示すところへ踏みとどまろうとする。つまり、実際の言述において、この二方向の構図は相互補完的に経験されていることだと結論づける。

私たちはよく、現実世界について実証的に報告しようとする

る言述と言語による虚構を幻想的世界として設立しようとする言述とを、気楽に区別する。が、じつは、ロゴスの構図の拡大解釈によつて説明されるはずの実証的報告のことは私が私たちに与えるものは逆ロゴスの構図によつて納得されるような言語化された世界であること、そして文学の言語的虚構が私たちにひとつの幻想的世界を与えうるのもまた、それが実証的報告の言語とおなじ対応性への期待による、ということとは明瞭ではないか。(p142)

ルポルタージュのことば遣いと詩人のことば遣いとはそれぞれに極端な虚構であつて、実は双方が錯綜してお互いを支え合うような言語運用の経験のなかに我々は生きている。したがって、「みんなお互い逸脱し合っている」現象こそが、もう一度向き合わなければならない言語的経験の実態であるということになる。では、語彙と文法という硬そうなコードも「意味の自己同一性」を前提にして考えられた理論装置ではなかったか、と佐藤論は言語＝ラングの存在自体を疑うという問題提起に突入していく。

五、弾性のなかの標準

私たちの意味論的な問題あるいは当惑にとつて、自己同一性の要請にもとづく均質な《言語》概念への不満は、ひとえにその木目の粗さに対するものであった。その堅さに対する不満であった。現実には私たちは、いつもことばの意味の自己同一性のたよりなさに戸惑つてばかりいるからである。それは、言語学者たちの《言語》概念の構造性が、私たちの実際のことばの意味の（好ましい、あるいは、困った）柔軟性を犠牲にしてはじめて首尾よく成就したものはなかったか、という疑惑をふくんだ不満であった。

（8）《同一の意味》から《自己比喩》へ（p 217）

我々の一人一人がそれぞれ数え切れないくらいに多様な、文字通り一つとして同じ出来事に遭遇しないとして、特にその出来事の質的な特殊性を取り上げざるを得ない多くの場合、習い覚えた語彙と文法のこれもまた個人差があるコードに頼つて、表現と理解の困難なプロセスをいやでも繰り返している、という経験的事実に忠実であるなら、言語とは共同体的な存在ではまったくない。つまり、他の誰でもよいという場合＝規定され

た構造的な記号体系ではなく、他ならぬ私という人称で始まり、それで終わる言述においては、その私の数だけ言述の意味も異なっていることになる。これは頻度順ではないし、複数性として数え上げられるような一つ一つそれぞれの意味を表すとも言えない。したがって佐藤論は、「意味の弾性」状態を提案する。ある理論的な言述においても、そこで使用されたある概念語は、他の言述内に引用、反復されることに微妙な意味の揺れ動きを伴つて現れると考えた方が実情に即しているなら、意味はつねに振動し、流動化と固定化とともに誘いながら言述の行使される場を待つているとイメージするのは極めて正当ではないか。『意味の弾性』の最後の章「10 意味の《遊動性》：意味の奪い合い」で、佐藤論はある一つの事態を言い表す文章の可能な文法的変異形、「統語的変異」を十数種試みて、それぞれの言述の場における語の意味の伸縮する様子をあらわにしてみせる。また、その説明を次のように展開していく。言語表現を待つている現実の事態をAとして、そこで選択可能な語彙群をBと限定したうえで、表現可能な文章をC～Fまでの変異形として数えられるとする。つまり同じ事態を表現可能な4種の文のヴァリエーションを想定する。そして、実際に文Cだけを与えられた読者は、ただCの構造をもった文のみを読み取つて、

そこに記述されている現実がCの表現構造通りであるとして、
C⇨Aを想定するのであるか、と問う。

もちろん、ちがう。

Cの構造の文を読むとはそれがDでもEでもFでもあり
えたはずだということを読み取る作業にはかならず、と、
私は主張したのである。(p 323)

Cの文のみという固定視点だけが許されるなら、その平面と
して配置された現実Aしか、どうやっても認識できそうにない。
ある文の中のある語は、可能性としての数々の文例を潜在的に
有しているからこそ、現実Aの立体視が可能となる。そうして、
たどり着くのは次のような考察だ。

あるいはAとはじつは「生の現実」ではなくCからFにい
たる統語的変異を成立させる条件にほかならず、と言いか
えたほうがいいかもしれない。それは統語的ヴァリエイ
ションから造形される結果と呼んでもいいし、統語的ヴァ
リエイションを生み出す原因と呼んでもいいような(どち
らの呼びかたも不正確な)虚の現実である。(p 324) : (中

略) : Aは、測定しやすい現実ではなく、CからFまでの
言語的認識によってなりたつはずの作業上の仮説だったか
らである。 : (中略) : あるものは、たぶんおびただしい
言語表現の変異形ばかりなのだ (p 352)

こうして佐藤の言語論は意味の一義的な弾性の様相を指摘し
ながら、言語表現の実相として出現しているレトリック現象の
根拠を洗い出し、また、多様性、多面性、複数性ということと
して表現され得るような揺れ動きこそが前提となつて、単一
性、同じ二一つという概念を入手することができるのだという
難解かつ繊細な思想へと到達する。

もっとも、佐藤信夫の文章表現⇨文体はそうした仰々しい理
論的考察へ入り込みそうになること、小難しそうな理屈になつ
てしまうことそれ自体をもっとも嫌ったようだ。しかし、こう
して、私が読み取ろうとした言語の本質を垣間見せようとする
かのような考察、というより表現は、既に『記号人間』の多く
のページの中にもさりげなく含まれていたし、『言述のすがた』
(青土社 一九八六・七) にもまた言及すべき印象的な文章が
多々あるのだが、ここまで佐藤論を読んできてはじめてずとん
と腑に落ちる記述を『意味の弾性』から引用してそろそろまと

めとしたい。

：一見体系的な術語ですら、弾性的な概念を体系的にはらむばかりはなく、むしろ実践上、自覚的に（機械の）《遊び》を予想した概念の運動こそいっそう高次の精密さを実現するための条件ではないのか、：（p 108）

精密機器を構成する各パーツの精度には「公差」が設定されるが、それは精度上の許容範囲であるよりも、実は、組み上げられた機器の正確な動作のために必要な誤差と言った方がいいのである。そんな想像をめぐらしつつ、あるいはこの拙文も引用文にかかわる統語的変異と言っていいなら、言語の弾性構造において成立する標準といった機能にもいろいろと思ひ当たるふしもあるようである。

最後にもう一つ引用する。意味の弾性現象を「曲線」、《意味の自己同一性》を「曲線を代理表象する」「近似的な直線」という比喩を用いて意味現象の現実とその理論との関係を説くところである。

言語理論がしばしば詩の精緻な分析を提示しながら詩人を

いらだたせてきたのは、おそらく、詩人たちはまさに曲線と近似的な折れ曲がった直線との相違部分にこそ詩を書き込んでいくからなのだろう。（p 242）

といった具合に、佐藤信夫の問題意識はその思考のさなかに、突然、思い出したように漏らされる。

注

（1）「認識とイメージのレトリック」（『説き語り記号論』日本ブリタニカ一九八・九「レトリックを少々」新潮社 一九八五・六所収）

（2）「緒論（第二部）」『哲学の方法―思想と動くもの―Ⅲ』（河野与一訳 岩波文庫 一九七七・二 第二二刷 一〇五頁）

（3）丸山圭三郎は『文化のフェティシズム』（勁草書房 一九八四・一〇）において「二重分節」という概念を展開し、人間の、世界への分節の仕組みを「第一次分節＝身分け構造」＋「第二次分節＝言分け構造」という二重化された形をイメージした。これは、言語による世界の切り分け以前に、生物・身体レベルでの切り分けがあることを示唆したもので、認識以前の世界において身体感覚による事物への関心がおおまかな分節を構成しているという解釈を示唆したものである。佐藤論の批判ではこの点に言及してはいないが、世界の分節に関わる問題提起において、この丸山論の提案は未だに再検討の必要があると思ひ

思っている。

追記・現在刊行されている佐藤信夫の研究書としては、講談社学術文庫に四点収められている。『レトリック感覚』（文庫番号一〇二九）・『レトリック認識』（文庫番号一〇四三）・『レトリックの記号論』（文庫番号一〇九八）・『レトリックの意味論』（文庫番号一二三八）であるが、最後の『レトリックの意味論』だけが品切れ中であり、これは本稿で中心的に扱った『意味の弾性』（一九八六年・岩波書店）を収めたものだけに残念で、一日も早い再刊を望んでやまない。また、『レトリックの記号論』の巻末には佐々木健一氏による要を得た解説が収められており、佐藤の研究業績のわかりやすい紹介もあるので参照していただきたい。

佐藤信夫の仕事は一九五八年刊行のビエール・ギロー『意味論』（文庫タセジュ・白水社刊）という翻訳から出発している。以降三〇年になろうかという言語論探究の仕上げが『意味の弾性』だとするならば、『意味現象』への問いこそがその生涯にわたる探究の核心であったと今更ながらに思う次第である。

なお、佐藤信夫は一九七五年から國學院大學文学部にフランス語の専任教員として勤務し、後に哲学科の開講講座であった「言語論」も担当した。この講義における様々な話題が先に挙げた著作へと展開していったことも記しておきたい。